

2020年度 大阪市立大学個別学力検査（後期日程）
文学部論文「解答例」

第1問

人文社会科学を生物学の一分野として統合するうえでの困難は二つある。第一に、社会生物学の中に、人文社会科学の諸分野にとって基盤となる「社会的なるもの」や「人間性」のような概念を書き換えかねない要素があったことが挙げられる。さらに第二の困難として、人間社会に関する進化論的説明が、扱う時間のスケールにおいても、要求される回答の性質においても、人文社会科学にとって適切とはみなされなかったことが挙げられる。(200字)

第2問

学際的分野が政治的な論争に巻き込まれやすい理由は二つある。第一に、まさにその分野が、社会の中にある複雑な課題を扱うことができているために、学術コミュニティを超えて人々の関心を惹きつけて、論争が誘発されやすい。第二に、これらの分野において扱われる問題が複雑であるがゆえに、明確な答えを出すことが難しく、対立が継続してしまう。学際的分野がもつこうした特徴を、著者は肯定的に捉えている。というのも、ある学問が人間社会に関わる切実な対象を扱うほど、その学術的な論争と政治的論争との間の境目は不明瞭になり、人間の認識の不完全さと対象の複雑さが合わさったとき、何らかの政治性が生まれることは避けがたいからだ。(298字)

第3問

著者によれば、複雑な対象を前にして価値中立を掲げるとき、マジョリティの価値観に浸っているために自らの政治性を自覚できていないおそれがある。自分の立場の政治性を意識する必要があるのは、マジョリティの価値を中立だと思いつく危険を回避するためである。ただし、著者はつねに価値中立を保つことが望ましいとは考えておらず、学問はむしろ現実の対象に近づくほど不可避の政治性を帯びると述べている。私たちはそれゆえ、それぞれバイアスのかかった学問体系を重ね合わせることによって世の中を見るべきだと著者は示唆する。このような著者の見解に対して、私は基本的に賛成の立場であるが、それほど楽観視もできない。というのも、様々な学問体系を重ね合わせることで相補的により豊かな世界像を描くことができる場合もある一方、著者も「不協和音」と述べるとおり、異なる学問体系やそれらの目的はときに相反することもあるからだ。そして、複数の学問体系が相反する場合、公正中立な議論と調停の場がやはり必要になる。そのような場が確保されていなければ、様々な学問体系の重ね合わせはうまく機能しないだろう。(476字)